

FDS Report

Faculty Development Staff

vol.2

学生FDスタッフ活動レポート 2008

CONTENTS

- 1 本冊子の発行にあたって
- 3 授業インタビュー <学生による印象深い授業を紹介!>
- 8 他大学交流 <岡山大学・山形大学とのFD交流を紹介!>
- 10 しゃべり場 <大学・授業への学生の本音を聞きました!>
- 12 編集後記

編集スタッフ (2008年度学生FDスタッフ)

政策科学部 3回生	平野 優貴
産業社会学部 4回生	小柏 円
産業社会学部 3回生	山西 悠祐
産業社会学部 2回生	太田 郁磨
産業社会学部 2回生	島田 慶一
国際関係学部 3回生 (APU交換留学生)	山瀬麻里絵
国際関係学部 3回生 (APU交換留学生)	チャン・スイン
法学部 2回生	森山 孝彰
政策科学部 3回生	高畠 朋美
理工学部機械工学科 4回生	内野 裕太
理工学部機械工学科 4回生	上口 雄大
理工学部機械工学科 4回生	下田雄太郎
理工学部機械工学科 4回生	大前 確
理工学部機械工学科 4回生	来山 一平
理工学部機械工学科 4回生	鈴木 崇也
理工学部機械工学科 4回生	田中 秀征
理工学部機械工学科 4回生	浅井 志郎
経営学部 1回生	横江 利優
経済学部 4回生	三島 慎司



冊子の発行にあたって

この冊子は、教育開発推進機構が進めるFD活動に参加する学生FDスタッフと教育開発推進機構が協力し、作成した冊子で、2008年度の学生FDスタッフ活動を中心に紹介しています。スタッフが取り組みを通じて得たもの、学生が大学や授業に対して感じていること、先生方が授業に対して持っている想い、授業への工夫を少しではありますが紹介しています。是非ご覧いただければ幸いです。

2009年3月 立命館大学 教育開発推進機構

おもしろい
学生が

おもしろい
先生と

おもしろい
授業を

創る

学生FDスタッフ

What's about

学生FDスタッフ？

学生FDスタッフ(略称FDS)は、学生が立命館大学における教育・授業をよりよいものにするという目的で結成されました。学生目線で授業をよりよくする方法というものを模索し、授業改善の為にFDS自らが行動しています。

学生FDSホームページはこちら

http://www.ritsumei.ac.jp/acd/ac/itl/itl_fd/index.html

WEB もしくは **学生FDS** で検索!

そもそもFDって何!?

Faculty(大学教員組織)とDevelopment(能力開発)の頭文字を合わせたもので、「授業改善のための組織的な取り組み」のことを指します。立命館大学のFDは、理念や教育目標を実現するために、カリキュラムや個々の授業について内容・方法等が適切かどうかを検証し、さらなる改善をしていく活動です。立命館大学では教育開発推進機構がこの役割を支援しています。

学生FDって何?と思われる人が多いことでしょう。本学のように活発な学生FDスタッフがいるところはまだ全国でも数えるほどですが、私はこれから増えていく成長株だと思っています。学生FDの中心は授業に関することですが、学生FDスタッフたちは授業改善への取り組みを通して、良い授業との出会いや良い仲間との出会いを求め、最終的には自らの成長を求める学生達です。この冊子を読んだ学生の人たちへ、あなたもFDしませんか?

(学生FDスタッフの顧問 共通教育推進機構教授 木野 茂)



information

学生FDスタッフ募集のお知らせ

教育開発推進機構では授業をはじめとした教育を行うにあたって、学生の声を積極的に把握することにより、教育システムを継続的に改善することが大切だと考えています。そこで、より良い授業づくりや授業・教育を改善する活動に興味・関心があり、本機構が進める取り組みに協力して学生の立場から主体的に活動する「学生FDスタッフ」を募集しています。興味のある学生さん、是非お問い合わせください。

応募方法

対象:立命館大学に所属する学生・大学院生 応募先:立命館大学 教育開発支援課

【衣笠】至徳館4階 【BKC】アドセナリオ1階 TEL:075-465-8304 MAIL:fd71cer@st.ritsumei.ac.jp

主な活動内容

- 学生発信で進めるよりよい授業づくり・教育環境づくりに向けた企画実施
- 教育開発推進機構がおこなう活動やイベントへの参加
- 他大学への事例調査 など

活動の進め方

学生FDスタッフ間で日程を調整し、定期的にミーティングを実施しています。ミーティングでの意見交換を通して、年度の活動予定を決めています。

01

無敵のコミュニケーションツールに迫る

担当
FDS



担当者
楠本 利夫

講義名称
総領事リレー講義・特殊講義(各部門共通)Ⅱ

開講学部
国際関係学部・法学部・産業社会学部・政策科学部・文学部

開講年度(受講年度)
2008年度前期

インタビュアー
国際関係学部3回生(APU交換留学生)
山瀬 麻里絵

授業概要

毎週関西駐在の総領事がリレー方式で講義するこの講義は、学生からの人気が非常に高く、世界の動きを肌で感じることもできる講義です。今回はコーディネーターとして奮闘しておられる楠本先生にお話を伺いました。

印象に残った理由

この講義は外交の先頭に立つ総領事に講演していただくのみならず、直接学生と意見交換を行っているという点で、とても刺激的です。講義で得た知識は普段ニュースや新聞などから得る情報よりも、印象的で鮮明に私たちの記憶に残ります。大講義でありながら、学生満足度が非常に高い秘訣を探りたいと思いインタビューしました。

Q. 総領事とのやり取りを含めて、授業を運営される上で気をつけられていることや、この授業ならではの特徴点を教えてください。

A. 本講義のポイントは『総領事手づくり』の講義であるということ、『学生参加講義』として、受講学生スタッフが活躍していることだと考えています。授業内容については「最後に質問の時間を設けてほしい」ということ以外は全て総領事にお任せしています。つまり、授業の資料などはすべて総領事が考えた内容になります。総領事がその時に重要だと思っていること、学生に伝えたいと思っている事が凝縮した授業になっているのではないのでしょうか。受講学生スタッフはレジュメ作成、授業準備、総領事へのインタビュー、HP掲載原稿作成などを行っており、授業における重要な部分を担っています。コーディネーターは学生と総領事両者が楽しく授業できるよう心がけています。授業構成員全てが、積極的に取り組む点がこの授業を大講義であるに関わらず、一つにまとめ、素晴らしい授業にしている秘訣だと思います。



▲ 総領事に質問する学生の様子

Q. 「学生への手紙」という人気のコミュニケーションツールがあると聞きましたが?

A. 「学生への手紙」は私から受講生へのメッセージです。毎回の授業で集める受講生のコメントカード全てに目を通し、まとめたものに、質問・意見への返答、私自身の考えや思いを載

せて、「学生への手紙」として学生に返却しています。学生への手紙は、学生自ら学んでほしいという思いから始めました。講義への好評文や感想よりも、クレーム等を中心に掲載しているところが、特徴的な点です。

第1講から第15講とこの手紙を続ける中で、学生の成長も手に取るようにわかりましたし、学生が授業で何を感じたか、考えたのかもわかりました。また、いかにこの授業に対して積極的に臨んでいるかを感じ、私自身への励みにもなりました。「学生への手紙」は“学生と教員の無敵のコミュニケーションツール”だと感じています。



▲ 学生への手紙

Q. 最後に楠本先生がこの授業を通して学生に伝えたいことをお聞かせください。

A. この授業では3つのことを学んでほしいと思っています。

1. 世界の息吹を直接肌で感じる大切さ
2. ものの見方
3. 大人としてのマナー

総領事から直接講義を受けることで、世界の動きを直接学ぶことはもちろん、新聞やニュースで持っていた知識と講義で学んだ内容に違いはないか、本音と建前は隠れてないかなどを学び感じる機会になればと考えています。また最後の項目は学生への手紙でいつも言及している点です。私語・飲食など受講態度ももちろんですが、それ以上に大人としてのマナーについて考えてほしいと思っています。



インタビューを終えて

「学生の反応が見えることが、教える側にとってモチベーションになる」は、インタビューの中で、とても印象的な言葉でした。学生の成長は「学生への手紙」や、授業風景から感じるそうで、週を追う毎に学生の意欲・関心が、向上することがうれしいとのことでした。

毎週総領事をお呼びし、400人の学生と共に過ごす15回に及ぶ講義は、一見華やかに見えますが、それを成功へと導くためには、様々な方の協力があってこそ成り立つものです。自ら学び、考えることの大切さと、共に成長することの喜びを教えてくれる授業だと感じました。

「この授業は今後立命館大学にかけがえのない財産となる」という言葉が先生のこの授業にかける熱い思いを物語っていると感じました。たくさんの人びとの手によって築き上げられたこの財産を、私たち学生がどう守り、どう輝かせていくかが、今後私たちに求められているものだと感じました。



02

「社会学の実技」授業の裏に隠された仕掛け

担当
FDS



担当者
景井 充

講義名称
自我論

開講学部
産業社会学部

開講年度(受講年度)
2008年度後期

インタビュアー
産業社会学部4回生 小柏 円

授業概要／紹介コメント

自我論は、大学での学びをあきらめかけていた私のスイッチを入れるきっかけになった授業です。一言でいうと「社会学の実技授業」。一見、学びとは程遠いイメージである“バラ産”＝産業社会学部のイメージを覆す授業で、その覆し方もハンパではありません。知識として「社会学」を説明するわけでもなく…だからといってコミュニケーション能力やプレゼン能力を磨くためにグループディスカッションをするわけでもない…ただ、社会学というものを「その場で(ライブ)」「リアルに」「体験を伴って」実感・試行することのできる授業です。

このインタビューでは先生の授業に対する工夫を紹介しています。しかし、先生があまりにも気さくで、そして丁寧に応答してくださるので、当初の予定を大幅に変更し、学生のホッペを遠慮なくギリギリアウトなところまで先生にぶつけてしまいました。

Q. この授業の印象に残った点の一つが、コミュニケーションペーパーに対する丁寧な応答です。この応答はセメスター中に3回ほど行われ、プリントに学生の書いた内容と先生の書いた応答(結構な分量)を掲載したものを配り、それを使って授業が1時間進められることもあります。このコミュニケーションペーパーで効果を期待することはどんなことですか？

A. 授業時間の最後のあたりで学生にコミュニケーションペーパーを書いてもらう時間はせいぜい10分程度にしています。その短い時間の中で自分の考えたことを書こうとするときは、十分に時間をかけて書くレポートなどとは異なって、かなりその人の直観的なリアリティが現れてくるはずだと考えて、そのようにしています。その「直観と結びついている思考の動かし方」を発見・体験してほしいと考えているんです。

学生たちは、自分の主観的なリアリティについて、勉強をする際にはそれは排除されるべきもの、抑圧されるべきもの、表に出してはいけないもの、という感覚を小中高で植えつけられてきていると思うのです。でも「そうではないのだ」ということを知ってもらうことがこの授業の大きな目的です。自我論の授業は、それまで学生が高校までに学んできたものをひっくり返すようなことを、本気でやっています(笑)。

短時間という緊張感を梃子に“お勉強”モードを解除し、その人の主観的なリアリティの核である直観を起動しようとしているわけです。これが第一の狙いですね。

Q. 先生から学生への働きかけという面でもう一つ、気になる点があります。それは、先生が授業内で本に書いてあることを批判することです。極端に言えば、批判に1時間使うこともありますよね??

A. あえて乱暴に言えば、「根拠があって筋が通ってれば何言ったっていいんだ!」ということを経験している人たちに知って欲しいのです。そのことは、「この人にはこの人の筋があるけど、別の立場から見れば、違うように見えるよ」ということにも繋がってくるんですよ。

僕がテキストにイチャモンをつけるのは、私が正しくてこっち(テキスト)が間違っているということではなくて、「立場が違えば物事が違って見えるし、論の組み方も変わってくる」ということを実演しているつもりなのです。そのことによって、教師と学生の縦の関係を相対化することにつなげたいのです。つまり、「何かが絶対だ」という発想を壊そうとしているのです。そして、それを踏まえた上で、その根拠の作り方、表現の仕方のトレーニングの場を提供できればいいと思っています。誤解のないように付け加えると、「なんでもあり」ということを伝えたいのではなくて、「答えは自分(たち)で生み出すもので、それはとても魅力的な営みだということを知って欲しいのです。」



その他以下の質問を先生にぶつけました。
先生の答えは是非“WEB”で!



学生FDSで検索!

Q. 私は、大学に入学した初めの頃にコミュニケーションペーパーなどを書く時になにか「できの悪い文章」「良くないもの」として否定される反応)をされるのではないかという恐怖感や不安を持っていたように思います。それについてどのように感じますか?

Q. 私たちのなかには「批判されること＝悪い事」という考えを持っている人が非常に多いのではないかと思います。そのような人に対して、先生がコミュニケーションペーパーやレポートまたは直接の会話の中で批判をするときに「いかに無意味にへこませないか」ということは難しいですよね??(笑) 無意味にへこませると学生の学びへの意欲がつぶれてしまうような気がします…。

.....他



▲ 自我論授業風景

03

リアルタイムに、進化する「日本経済論」

担当者

高橋 伸彰

講義名称

日本経済論

開講学部

国際関係学部、
国際インスティテュート国際法務プログラム

開講年度(受講年度)

2008年度後期

インタビュー

政策科学部3年生 平野 優貴

担当
FDS



授業概要

日本経済についての講義です。シラバスにも「経済学の専門知識がなくても理解できるように分かり易く講義を行う予定である。」と記載されている通り、経済・数学が苦手な学生にも理解しやすい授業を目指して行われています。

印象に残った理由

多くの国際関係学部の学生からこの授業を推薦され、授業を見学し、インタビューしました。実際に受講してみると、シラバス通り、数学が苦手な経済の専門知識がない私にもわかりやすい授業が展開されていました。現実起こっている経済の問題も頻繁に取り上げられる「リアルタイムな」授業でもありました。

Q. 経済学の専門知識がない学生にも理解しやすい授業を行われるのはなぜですか？

A. 数式を使うと論理的に説明できますが、経済学の本質的な意味が失われます。**数式を使った論理性よりも本質的な意味を大切にしたい**と思っています。経済学は応用数学ではなく、モラル・サイエンス(道徳科学)だということを教えたいと思って授業をしています。教室ではレジュメを配りながら「今日はこういう風に説明しようか」とギリギリまで考えています。

Q. 授業内では日本経済新聞も用いてリアルタイムな話題を解説して下さるのでわかりやすいですね。

A. あれは実は行うつもりではなかったのです。「新聞ばかり読みすぎると経済学はわからないよ」と言うつもりで最初の授業で説明したつもりなのですが、「おもしろい」といった感想が多かったので、思わず今年度は日本経済新聞を使うようになりました。2008年はたまたま「100年に1度の金融危機」が起こったので、それをリアルタイムに伝えようと新聞の新しい情報を使っています。

Q. 「100年に1度の金融危機」を受けて、やはり内容を大きく変更されましたか？

A. 理論の部分は変わりませんが、その他の内容は今年に限らず毎年変えます。やはり経済は生き物ですから、「**生きている経済**」を伝えるために、当然ですが**レジュメの統計は毎年更新しますし、自分自身も1年間勉強するのでその成果を授業に反映するようにしています。**

Q. 経済学とは直接関係のない話もたまに登場しますが、それもやはり経済学に親しみを持たせるためですか？

A. やっぱり集中力は90分続かないでしょ？だから私も学生の皆さんも一呼吸入れた方が良くってリフレッシュのために入れています。もちろん、そればかりだと授業になりませんけどね(笑)。経済は人間の営みだし、経済学者も経済をやっている以外は普通の人間だから、そういうことも知ってほしいと思っています。

Q. 授業で配布されるレジュメはすごく充実していますが、**授業に出席することでさらに深い話が聞けて初めて完結する内容・分量に感じました。**

A. そこまでは考えていませんが、基本的には惜しみなく書いてしまいます。本当は空欄なども作れば良いのかもしれませんが…。義務付けてはいませんが、**この授業をはじめたときから今まで1回も欠かさずコミュニケーションペーパーを通して、感想・質問を集めています。それらを踏まえてレジュメや説明の仕方も改善しますし、次の週にもう一度説明をし直すこともあります。**毎回授業後には振り返って反省しますが、よい授業ができたと思うのは15回のうち2、3回であとは「もうちょっと工夫すればよかったかな」とか「あそこはこう説明すればよかったかな」とか「ちょっとしつこかったかな」など反省点がいろいろと出てきます。

Q. 授業からは外れますが、国際関係学部では先生ごとに時間も公開して大々的にオフィスアワーが行われていますね。そのような制度は他学部の学生にとって非常に羨ましいですが如何ですか。

A. 学生は来ませんね(笑)しかし、オフィスアワーの制度があることによってそれ以外の時間に来る学生は多くなったのではないのでしょうか。この制度が「研究室に



行っても良い」というシグナルになっていて、恒心館1階の表示(エレベーター横)を見て電気が点いていたらそこから内線電話がかかってくることもあります。

Q. 最後に学生に向けたメッセージをお願いします。

A. やっぱり本(活字)を読んで欲しいです。最近は誰もやってくれないのであまり言いませんが、「**大学に入ったら卒業までに活字を10万ページ読もうよ**」と言っています。300ページの本を1年間に100冊読んだら4年間で400冊12万ページ、ちょっと割り引いて10万ページです。大変な量に見えますが、1日100ページ、3時間読書すれば達成可能なので大学に入ったなら目標にしてほしいです。

この授業のポイント!

- ・専門知識がなくても理解できる経済学!
- ・経済は生き物!「生きている経済」を学ぶ!
- ・コミュニケーションペーパーを通して授業が進化する!



04

PEACE STUDYに迫る!

担当
FDS



担当者

MILLER WARREN A.

講義名称

英語・国際研究I(国際秩序平和)

開講学部

国際関係学部

開講年度(受講年度)

2008年度前期

インタビュアー

国際関係学部3年生 (APU交換留学生)
CHANG Su In

授業概要

この授業では国際関係における戦争について学びます。さまざまな種類の戦争があること、今なお、世界各地で行われる戦争について、人命の観点・経済的な観点から学び理解を深めることで、平和に対しての理解を得ることを目的としています。

紹介コメント

歴史学・特にアジアに興味をもち、研究を進めてこられたMILLER先生が担当されています。戦争を通して平和について学びますが、ホームワーク含め相当程度の英語力が要求されます。そういう意味で大変な授業ですが、受講生は皆楽しく受講しています。今回は日本で授業を行う際の工夫や、日本の英語教育についてもインタビューしました。

Q. Peace Studyという授業を持つようになったいきさを教えてください。

A. まず私の関心の高い分野で、良い経験になると思ったからです。大部分の日本人が戦争の理論に対する認識が浅いと思いました。戦争の歴史を知ることは大切です。戦争に対して理解を深めてほしいという願いからこの授業を持つようになりました。

Q. 今回の授業での先生としての目標や、授業の目標を聞かせてください。

A. 私としては授業の目標に合わせて学生を教育すること、それから**学生たちに授業の意図・内容を上手く伝えたい**と考えています。今回の授業では多様な授業資料を通じて学生たちの英語実力を向上させることが出来ると思っています。ビデオ、授業資料、リーディング資料などの多様な資料を使って授業を進めています。

Q. この授業は他の授業より学生たちが英語の勉強に熱心だと言われていますがその理由は何でしょうか。

A. 個々の学生によって違いはありますが、**一人一人が積極的に参加できるように授業づくりを工夫しています**。グループ作業・発表をさせるのもそのためです。**グループとしても個人としても、学生がアクティブに質問などを通じて授業に参加する事が重要だと考えています**。

Q. 教えるとき一番重要だと思っていることは何ですか。

A. 私は英語で授業を行いますから、言語の壁が当然あります。ですから、私が話していること、教えていることを学生が理解できるように努力しています。私が外国人学生として授業を受けたとき、先生が話す内容をまともに理解す

ることができなくて苦労したことがあります。したがって**すべての学生が私のことを理解できるように努力しています**。積極的に**学生が授業に参加することに重点を置いて、私が一方的に話すよりは学生との双方向のやり取り含め、多様な方法で学生が積極的に授業に参加できるようにしています**。そして**学生たちが戦争・平和についての講義のみならず、英語学習も楽しめるように工夫をしています**。

Q. 日本で教えるのに大変なことはありますか。

A. クラスによって語学力が異なるところに難しさを感じます。とあるクラスで特別な注意や説明が必要な場面でも、もう一方のクラスは全く必要としない場合などです。どのクラスも長所・短所がありますから、全て同様ではなく、スピーキング・ライティングなど各クラスの不足している部分に配慮しながら指導しています。**学生が積極的に参加できるような授業というものが、授業をより楽しく、深く理解する上でとても重要なことだと思います**。

Q. 英語を十年間学んだのですが英語に自信がありません。日本の英語教育に対してどう思われますか。

A. とても難しい質問ですね。言語を学ぶときは多くの壁があります。どんな教育システムも完璧ではありません。いままで皆さんは話す時間を多くもっていなかったのではないのでしょうか。代わりに読み・書きの力が強いですね。それは日本の英語教育システムが読み・書きに重点を置いていたからです。そのような教育システムは良いと思います。しかし、また同時に不足部分の英語能力を補うための機会があればより良いと思います。そのような観点で、私は、学生たちの必要な英語能力向上に手助けになれ



るよう努力しています。

私も日本語を学んでいますが時々挫折しますし、話したいことを話せない場合も多くあります。しかし誤った文章を通じて沢山のことを学び、またそれを直すために努力をします。私は100個の誤った文章を言うことを恐れません。その中で5個だけでも正しいことを覚えたらそれは意味のあることです。問題を解決するために自分の失敗から学んでください。これは今回の授業で強調した戦争スタディと相通ずる部分です。

学生へのメッセージ

戦争についての学習は、大部分の人々が難しさを感じ、疎がる分野です。初め、私は学生たちがどの程度戦争を理解しているかあまり分かりませんでした。しかし、授業内のレポートなどを通じて学生たちの戦争に対する知識がどのくらい分かりましたし、最終レポートで学生たちの大部分が戦争に対してある程度以上の理解を持ったということが分かりました。どうして私たちが戦争をするのか、どうして国家が戦争をするのかなど、戦争を現実的に学び考えるべきです。このような思考を通じて戦争について、平和について個々人が意識し、考えをもつようになることが私の授業の目標です。

05

今まで気づかなかった自分の住むまちの「いいところ」を発見できる「景観デザイン論」

担当
FDS



担当者
永橋 為介

講義名称
景観デザイン論

開講学部
産業社会学部

開講年度(受講年度)
2008年度後期

インタビュアー
産業社会学部2回生 太田 郁磨

授業概要

『持続可能な環境や社会を形成する作法としての景観デザインの発想法と方法論を学ぶ』授業です。その際、先生を含めた授業の中の一人ひとりがそれぞれの人生経験から培った様々な考えや意見を共有し合い、都市における問題解決やより良い社会のあり方を模索するという方法を採用しています。

紹介コメント

永橋先生は今年度(2008年度)から立命館大学に来られた、産業社会学部の先生です。私は前期の環境形成論も受講していましたが、学生一人ひとりの意見を尊重してフレンドリーに接する永橋先生の姿勢をすばらしいと感じ、どのような思いや工夫を考え授業に挑んでいるのかに興味を持ち、今回インタビューを行いました。

Q. 景観デザイン論で心がけておられる工夫を教えてください。

A. 乱暴な言い方かもしれませんが、僕の授業では、**学生に対してなるべく「教えない」ことを試しています。**僕の専門である環境デザインやコミュニティ・デザインという応用分野には当然、原理、原則、論理がありますが、生きた社会やプロセスを扱いますから、僕が現場で考えた悩みだりした経験を伝えたい。「あなただったら、こんなときどう考える?どう動く?」と投げかけて、その反応を教室にいる全ての人と共有し、僕もそこから学びたい。そこから原理、原則、論理を吟味したい。僕が「**学生時代にこういう授業だったら受けたいな**」と思っていた授業に**チャレンジしているところ**です。

Q. 学生が書いたコミュニケーションペーパー全てにチェックやコメントを入れていますよね。大変ではないですか?

A. ものすごく時間がかかります。A4用紙、100人超の記述全てを入力することもあります。多分週10時間位(笑)。睡眠時間削って入力したりコメント書きしたりしています。でも、これは学生だけでなく、僕にとっても意味あることなんです。**学生の反応から僕自身、より深い考え方にたどり着き、世界を広げ、それを学生に投げ返し、創造的なやりとりをさらに展開することもできます。**これがピタっとうまくいくときは、多くはないですが、自分が本当に豊かになった気がするし、学生に感謝の気持ちが出てきます(笑)。



▲ 景観デザイン論・課外授業「京都まちながまちあるき」

Q. 永橋先生は日本の大学を卒業した後アメリカの大学で学ばれたそうですね。「教える形を取らない」というのは、アメリカの大学で影響を受けたものなのでしょうか。

A. カリフォルニア大学バークレー校の客員研究員時代、師匠のランディ・ヘスター教授の授業や実習に参加しましたが、彼は常に学生と同じ目線で授業をし、「**いいところ探し**」をさせていました。**作品や成果物が、明らかに準備不足と分かっていても、「ここがいい」「こうしたらもっと良くなるんじゃない?」と常に投げかけ、やりとりする。**単に駄目出しをするより、すごく労力と時間がかかりますが、**やりとりを通じ、相手にも自分にもやる気や創造性が溢れ出てくる。**相手の力も自分の力も数倍引き出す実践を目の当たりにして、とても驚きました。

Q. 大人数教室での私語問題には「先生が一方的に話す授業がつまらない」といった学生側の声がありますが、先生はどのように考えますか?

A. 大講義で先生が一方的に話をしてモチベーションが下がる、というのは僕にも経験があります。大講義のシステムや教員の教え方にも改善の余地はあるのでしょう。しかし、今思うのは、**僕が学生の頃に「いいところ探し」の作法を身につけていたら、状況は変わっていたかもしれない、**ということです。探し出した「いいところ」を先生に伝えたら、先生もうれしくなって、「いいところ」を増やそうという気になったんじゃないか? 又はどうしても直して欲しいところがあったら、「～すべきだ!」「～せよ!」という批判的要求ではなく、「**こういうところが残念です」「こういうふうになると、とてもうれしいです**」という「自分発のメッセージ」を投げかけた方が良かったんじゃないか?と思っています。創造性を高めるトレーニングにもなりますし。それをせず、単に「つまらない」とモチベーションを下げていたのは、怠慢・言い訳に過ぎなかったんだな、と思います。



偉そうなことは言えません(笑)。でも、授業中の私語は論外。社会ルール違反です。他の学生に迷惑です。学生同士で「ちょっと静かにしてくれない?」って言いあえる場や関係性が作れたら素敵ですね。まず隗より始めよ、ですかね。

Q. 最後にメッセージをお願いします。

A. 都市も人間も不完全だと思っています。間違えることが多々ある。だから偉そうなこと、正しいことを言うときは気をつけないといけない、と自戒しています。「間違えから学ぶ」「間違っているかもしれない、ということに自覚的」ということが大事。先生も、学生に悩む姿をさらけ出したり、「これ、わからないんだけど、どう思う?」という投げかけをしたら良いと思います。**お互いに不完全で、間違え存在だからこそ、つながれる、補いあえる、力を引き出しあえる。**もちろん、先生の方が知識も経験も積んでいるので、一日の長がありますが、**先生と学生、そして学生同士がそういうやりとりを展開できる場に授業がなるといいですね。**そのために「いいところ探し」という姿勢が大事なんじゃないかと思っています。



この授業のポイント!

- ・地域が抱える問題点や工夫点を学ぶ!
- ・他の学生の Secret Place (特別な場所) や考え方を知ることができておもしろい!
- ・自分の住む町を新たな視線から見れる!



岡山大学との交流

第5回教育改善学生交流「i*See2008」

2008年9月18日(木)、学生FDスタッフが岡山大学のi*See2008に参加してきました。
『i*See』とは、岡山大学が主催する大学における教育改善を目的とした学生の交流イベントで、2004年度より毎年開催され今回で第5回目となります。

でもなぜ岡山大学なのか？実は岡山大学は立命館大学と同じように大学の授業改善に非常に熱心な大学として注目されているのです。両大学に共通するのは教員だけでなく学生が授業改善に積極的に携わっている点。多くの大学の学生が集まるということで、学生交流というものですら初体験であった私はドキドキしながら新幹線で岡山へ・・・。

イベントには岡山大学・立命館大学以外にも早稲田大学・静岡大学・畿央大学・北九州市立大学等、全国から学生が集まりました。イベントの内容は、各大学から参加した学生・教職員が複数のグループにわかれ学生交流につながるイベント案を考えるというものでした。「理想の授業の全国大会」「大学職員がつくる授業」などといった各グループで様々な独創的な案が出されました。何より驚いたのは参加した学生の熱意と積極性。大学の授業をもっとよくしたいという学生の思いはどの大学でも共通するのだなあと感じました。イベント後は他の学生や教職員さんと立食パーティ。イベントでは聞けなかったプライベートな話や相談などもすることができ、大学の交流が深まったと同時にFD活動の枠も広がりました。

(産業社会学部2年生 太田 郁磨)



▲ グループワーク風景

山形大学との交流

2008年6月、立命館大学と国立大学法人山形大学は教育・研究・その他諸活動の分野において学術および文化的交流を深めることを目的として包括的協力協定を締結しました。山形大学は6学部・5研究科を擁す、東北地方有数の総合大学です。山形大学は本学と同様「学生が主役の大学創り」をコンセプトに、2004年度以降「地域ネットワーク“樹水”」や「東日本ネットワークつばさ」など実質的なFD活動の推進や教学改善への学生の参画などに積極的に取り組んでいます。2008年度は協定締結を契機に ①学長交流 ②学生交流 ③職員交流を軸とした交流が進められました。

学生FDスタッフはこの交流のうち、学生交流に参加することになりました。2008年度のテーマは「学生中心の授業づくり」と「地域に生きる大学づくり」です。プログラムに参加することになった両大学の学生とともに、相互訪問するなかで、これらテーマについて議論を重ねました。交流によって今後の活動にもつながる多くの刺激を受けることとなりました。



▲ 締結の様子



▲ 成果発表会を行いました

■ 学生交流プログラム概要

テーマ▶ 学生中心の授業づくり・地域に生きる大学づくり	
交流プログラム1 山形大学訪問 [2008年10月17日(金)～10月19日(日)]	1回目交流の主なプログラム ・立命館大学 川口総長講演会「日本における私立大学改革の課題と立命館の経験」 ・授業参加「秋からのキョウヨウ教育必勝法A(教養セミナー)」杉原真晃先生 ・山形大学のFDを学ぼう「山形大学の教育改革」小田隆治先生 ・共生の森もがみ参加 戸沢村農村環境改善センター 里の自然文化研究講座Ⅲ「郷土料理と里山づくり編」
交流プログラム2 山形大学訪問 [2008年10月24日(金)～10月26日(日)]	2回目の主なプログラム ・授業参加「秋からのキョウヨウ教育必勝法A(教養セミナー)」杉原真晃先生 公開講座 ・山形大学の社会連携を学ぼう「山形大学の社会連携」小田隆治先生 ・山形大学蔵王山寮見学とフィールドワーク ・山形大学学園祭八峰祭参加
交流プログラム3 立命館大学受入 [2008年11月13日(木)～11月16日(日)]	3回目の主なプログラム ・立命館大学学生FD活動を学ぼう「しゃべり場開催」テーマ:教養教育 ・授業参加「現代環境論」受講学生とのディベート大会 木野 茂先生 ・立命館大学・地域交流の取り組みを学ぶ① 学生サークル編 ・立命館大学・地域交流の取り組みを学ぶ② 映像学部編 松竹
交流プログラム4 成果発表会[12月20日(土)]	山形大学東京サテライトキャンパスにおいて 両大学学長に交流成果を発表



■ プログラム紹介

共生の森もがみ

山形大学と山形県最上地域8市町村は地域活性化・人材育成を目的に「エリアキャンパスもがみ」として、地域をキャンパスと見立てた連携・取り組みを行っています。

中でも柱として行われている「フィールドワーク・共生の森もがみ」は全学部教養教育科目として全学部から受講生を集めて行う現地体験型プログラムで、最上地域の豊かな自然・伝統文化、それを守り伝える地元の人々との交流を素材にした山形大学ならではの授業です。

参加者コメント

今回は数あるプログラムの中から、「里の自然文化研究講座Ⅲ 郷土料理と里山づくり編」1泊2日に参加しました。この授業において我々は、現地の方々の指導のもとに森の間伐作業を体験したのち、現地の家庭にホームステイしました。ここで、大学における授業の在り方、人間形成の方法を考える機会に加え、大学と地域社会の相互の関わり方を考える上での基礎となる経験ができたことは非常に有意義でした。

(法学部2回生 森山 孝彰)

間伐作業の様子▶



▲ 地域住民の方との懇談会



▲ グループ毎でテーマについて話し合います

秋からのキョウヨウ教育必勝法 杉原真晃先生

大学での「教養教育科目」の意義と自分なりの「活用法」を探究・実践することを目的とした授業で、学生各自が自由なテーマを設定し、テーマ毎に編成されたグループ内でディスカッション・議論を通じて互いに学びあう少人数制教養科目です。

授業を通して、大学教育・教養教育について考察するだけでなく、学生同士のグループワークを通し、主体性や責任性、批判的思考、他者への気づき、などを身につけることを目標として行われています。

参加者コメント

杉原先生の授業に参加して驚いたことは、授業でありながら学生は「自由」であるということです。私が入ったグループでは、大学構内での駐輪モラルや音楽が日常生活に与える影響について、など極々身近な疑問をテーマにしている学生がいる一方で、何をテーマとして選んでよいのか悩んでいる学生もいました。問題意識を持つことから始まり、疑問を追及するというどこまでも主体的な授業は同じ学生として興味深かったです。

(経営学部1回生 横江 利優)

立命館大学地域交流の取り組み サークル・映像学部編

・立命館大学の地域交流の実態

「立命の家実行委員会」(滋賀県に住む小学生向けに夏休みに体験講座を開催している団体)や「Bridge」(学生による地域防犯パトロール団体)と交流を行い、BKCの地域交流の実態を学びました。

・映像学部の取り組み紹介

立命館大学の特色ある社会連携の一例として、映像学部・富田教授により「京都と映画」をテーマとしたレクチャー、映像学部の地域に密着した教学実践の紹介をしていただきました。また映像学部と連携している松竹撮影所にもご協力いただき、撮影所の見学を行いました。

参加者コメント

映像学部の概要を紹介していただき、松竹の撮影所と併設して建設中の新施設も見学しました。同じ衣笠キャンパスで学びながら多くの学生にとって交流する機会が少なかった映像学部ですが、授業の内容や京都で映像を学ぶことの意味を知ることができ有意義でした。その後はフィールドワークとして「大学の街」でもある京都と大学の関わりを調査しました。大学の以前に「地域で学ぶ」大学生として地域とのつながりの重要性を再認識しました。

(政策科学部3回生 平野 優貴)



▲ 松竹撮影所フィールドワークの様子

しゃべり場

しゃべり場とは

- ①学生FDスタッフの活動の一つとして、2008年度から開始した企画
 - ②大学や講義に対する「学生の本音・意見」を知り、学生実態を把握する
 - ③しゃべり場で出た学生の声を教学改善に反映していく
 - ④学部・回生に限らず幅広い学生が参加できる、単発でも参加できるFD企画の場
- 上記を通して、学生FDスタッフの活動をより多くの学生・教職員に知ってもらうことを目的に企画し、2008年度は10月、11月、12月の3回行いました。1回目そして2回目しゃべり場について紹介します！

第1回「しゃべり場」講義が面白いと思った瞬間

開催日時:2008年10月21日(火)

コメント

全学から自由応募で集まった学生を中心に行いました。所属学部・回生はもちろん、様々な興味・関心を持って集まった学生同士、大学での学びから日本の教育についてまで議論することとなりました。

第1回企画の意図

「しゃべり場」は一言で言えば、日ごろ「講義」に対して感じている本音をざっくばらんに発言してもらう場です。普段学生FDSで行っているミーティングと違うのはあえて議論の明確なゴールを設けていないところ。具体的に言えば、議論の中で出た発言のエッセンスを取り出すことが目的で、そのエッセンスをその後のFD活動に活用していこうというものでした。第1回ということでトピックは多くの人が馴染みやすい「講義が面白いと思った瞬間」に選定し、学生の本音を引き出すことに特に注力し、行いました。

【面白い講義の構成要素は何か？】

以下のような論点が議論では出てきました。

面白い先生

- その分野について、専門に偏らず、ジェネラルな部分も含め教えてくれる。
- 多様な社会経験を積んでいるなど、様々な側面を持っていて、授業でも様々な場に学生を連れ出してくれる先生。特に自分の専門分野でそういう先生に出会えば言うことなくうれしい。
- 学生が主体的に考えるスタイルの授業
- 自分の興味のある分野を自由に調べ、考察し発表できるような授業

学生のモチベーション

- 何よりも学生の授業に対する姿勢、モチベーションが大切。将来のビジョンから逆算して、今何をしなければいけないのか考える必要がある。それができれば授業に対する目的意識は大きく変わるはず。大学に入学する前のステップであるが、できていない人が多い。

先生と学生のコミュニケーションが取れている授業

- 授業は教員・学生ともに一期一会が大切。受講時に周りの学生とコミュニケーションを取ることができたり、講義内容を共有したり、価値観をぶつけ合えるとより授業が楽しくなる。また総合大学の良さも活かせると感じる。

まとめ

様々な発言の中で、最後に収束したのは「先生のティーチングスキル」と「学生自身のモチベーション」でした。視覚効果の利用や話し方、学生を引き込むような話題の選択といったティーチングスキルは先生方の創意工夫のたまものであり、そういった講義に対する熱意、つまりモチベーションに魅力を感じる学生は多いようです。

そして、先生のティーチングスキル以上に大切なのはやはり学生のモチベーションであり、いかにして、学生のモチベーションをあげるかが課題であると議論は落ち着きました。学生時代のなるべく早い段階で、学生1人1人が自分と向き合う機会を持ち、今学びたいこと、学ばなければいけないことは何なのかを明確にすることで講義に対する目的意識は確実に高まると感じました。そうした機会を設けることも学生FDスタッフとしてできることの1つではないかと考えさせられました。

(理工学部 4回生 上口 雄大)



▲ 第1回しゃべり場の様子



第2回「しゃべり場」 教養教育とは？

開催日時:2008年11月13日(木)

コメント

山形大学と立命館大学交流プログラムの一環として、交流学生および学生FDスタッフで行いました。教養教育といっても両大学で異なる点は多く、議論の中で学ぶことも多かったようです。

第2回企画の意図

第2回しゃべり場は山形大学と立命館大学の交流プログラムの一環として開催されました。今回のしゃべり場のテーマは『教養教育とは？』であり、山形大学と立命館大学の各学生がそれぞれの大学における「教養教育」の良い点・悪い点を出し合い、今後のFD活動に役立てようと議論をしました。

今回のしゃべり場で注目されるのは、私立マンモス校である立命館大学と国立、地方中規模大学の山形大学とで授業内容・雰囲気にはどのような違いがあるのかといったところです。なお、議論の初めに、両大学の「教養教育」についての認識を一致させました。立命館大学での「一般教養科目」は山形大学で立命館大学の「一般教養科目＋基礎専門科目」にあたると確認した上で意見を出しました。

【教養教育において印象的だったものは？】

立命館大学

- 大教室での数百人規模の授業でも先生が学生に問いかける、コミュニケーションをとる、など一方通行ではない授業。
- 試行錯誤を繰り返して授業を進めていて、その改善姿勢が印象的な授業

山形大学

- 地域と大学と学生の距離が近い実践的な教養科目
- 講義が終了した後も、身近なものをとおして学びを実感できる授業

【教養教育において問題点は？】

ここで問題点としての議論が発展し、立命館大学と山形大学との大きな違いの発見がありました。それは、山形大学の教養教育は「一般教養科目＋基礎専門科目」であること、この教養教育科目に理系・文系関係なく全学部生が受講可能であることです。このことは立命館大学の一般教養科目が必要とされ、逆にこれを実施している山形大学では問題となることも多々あるようです。

具体的に、全学部生が同じ基礎専門科目を受講することを想像し

てください。この場合、大きな利点、つまり立命館大学に不足していることは、“**同じ講義を受講している学生同士で教え合う・学び合うという姿勢**”です。例えば「数学Ⅲ」の授業では、文学部の学生に情報理工学部の学生がわからないところを教えるという光景です。授業内容を教えてもらう学生はもちろん、わからない人に教える学生にも大きなメリットがあると考えられます。

一方、山形大学ではこのシステムによって、学生が協力し合う風土はあるものの、学生間には授業開始時から文理の差(知識・得意不得意の差)があり、授業を難しく感じる学生と授業内容が物足りないと感じる学生がいるという問題点があることがわかりました。

また、議論の中で「そもそも教養の授業はなんのために受けるのか?」という「教養科目を受講する意義を学生が理解できていない」という問題点も明らかになりました。

まとめ

両校の教養教育は異なる点も多く、実施スタイルの違いによる良い点・悪い点も見つかりました。両校は今回の交流をもとに、積極的に良い点を吸収し今後の教養教育科目の改善につなげていくことが大切だと考えられます。また「教養教育の意義」に疑問を持つ学生が多いという点については、授業を受講する「学生のモチベーション」にもつながります。特に立命館大学ではマンモス校ゆえに講義が大人数になり、1人1人に対して講義そのものが淡白なものになることもあるかもしれません。「学生のモチベーション」の改善は第1回目しゃべり場でもキーワードとしてあげられた問題点です。授業のスタイルとして、今後の改善は望まれますが、同時に学生自身も現在そして未来の自分につながるものとして教養教育・その意味を考えることが必要なのではと考えさせられました。

(理工学部4回生 内野 裕太・下田 雄太郎)

編集後記

2008年度の学生FD活動は、まさに『衝突と創造』といえるものでした。今年度の学生FDスタッフには自分の考えやビジョンをしっかりと持っている学生が多く、それゆえに意見の衝突も数多く生じて、ときには衣笠の学生とBKCの学生が激しく対立するような事態にも発展しました。しかしその後、イベントの開催や議論を重ねるなかで互いが歩み寄るような努力をおこなった結果、既に多くの活動が展開されているFDという分野において、『おもしろ学生とおもしろ先生による、おもしろ授業づくりに取り組む』という、独自性と可能性の高い活動ビジョンを創造することができました。



私を含め、BKCスタッフの半数以上は今年で大学を卒業しますが、来年度以降のスタッフのみなさんが、今年度の活動で得られたものを活用しつつ、さらに高いレベルで活動を展開していただくことを期待しています。

最後に、終始変わらぬご指導・ご支援をいただいた木野茂先生はじめ教職員のみなさん、学生FDスタッフ活動に関わってくださった全ての皆様に、深く御礼を申し上げます。

学生FDスタッフ びわこ・くさつキャンパス(BKC)代表 理工学部4年生 内野 裕太

学生FDスタッフの2008年度は3名という少人数での幕開けでしたが、衣笠・BKCの学生に加えAPUからの交換留学生といったバラエティに富んだ新スタッフに恵まれました。それほどに多様な学生が集結すれば文化や問題意識、FD活動に参加する目的も千差万別という状況でした。しかしその中で意見をぶつけ合いながら議論を重ねることで昨年度には実施できなかった「しゃべり場」や「ホームページでの活動紹介」を実施できたこと、また、かねてから積極的に行っていた「他大学との交流」においても大学を挙げての山形大学との交流に参加できたことなど、活動の幅を広げられたことは3万人以上の学生が在籍する立命館大学の学生FDスタッフとして成長の大きな一歩であったと感じています。来年度もボリュームダウンすることなく「おもしろ学生」としての活動を展開していく決意です。



学生FDスタッフの活動に関わってくださった教職員の方々、スタッフ以外の学生のみなさん、他大学の方々、全ての方に感謝しております。ありがとうございました。

学生FDスタッフ 衣笠キャンパス代表 政策科学部3年生 平野 優貴

APUパワーを立命館に！ 交換留学生としての一年間で、FD活動を通してどれだけ立命館に刺激を与えられるか、どれだけ貢献できるか、私たちにとって大きな挑戦でした。結果として両校の差異から授業改善における問題点や解決策を見出すことで、立命館大学及び立命館FDへ何かしらの刺激があったのであれば幸いです。姉妹校ながらも、両校の学生同士の交流は十分とは言えません。そんな中、この活動を通して両校の架け橋となったことを嬉しく思います。今後はAPUでもFD活動を継続し、仲間たちと授業改善を通して互いに学び、考え、成長することで、ここで出会った多くの皆様に心から感謝の気持ちをお伝えできればと思っています。ありがとうございました。



立命館アジア太平洋大学 アジア太平洋学部(立命館大学国際関係学部)3年生 チャン・スイン、山瀬 麻里絵